

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

②

取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた提供

「技術はちやうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまつことになるんだ。若いエンジニアたちが議論を交わす（『電卓戦争の軌跡』シャープと方シオ）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（『セイコー・クォーツの世界』）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出作となった「匠の時代」。1978（昭和53）年にタリフジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見だし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に12冊の文庫になるほどの生命力を持った。40年を経た今も瑞々しい。

当時、タリフジの経済担当部長だった島谷泰彦さん（8月に90歳で死去）は内橋さんと作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同じ年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった土場の門、歩いた生産現場、語り合った技術者たち。「取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった。粘りに粘つてくれ

匠の時代



タリフジの名編集者として内橋克人さんを書き手を育てた島谷泰彦さん（2010年）



あげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

■自費論への賛論

80年代初頭、バブル経済に向かう時期日本企業の技術は米欧を超越超一流だという「自費論」が盛り上がりついで。戦後の「追いつき追い越せを自費論に登った頂で得た」ジ

地域と響く「実の技術」

ヤパン・アス・ナンバワーン」という賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国三ッポ』」（82年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…「アメリカを超えた」など言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦をもっと真面目に評価する姿勢を持つことが、「『自費論』から覚醒する道である」と思われる。

それから約40年たったいま製造業の現実とはどうなるか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれなばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん、捏造、法令違反、リコール（回収・無償修理）…生じた集約は次第に広がり、破綻に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆。そして未来を望むことの大きさについて再確認したい。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセジはいまも切実に響く。

（加藤正文）

神戸新聞2022.9.2.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

③

市場原理至上主義批判を行なった内橋克人さん
神奈川県鎌倉市の自宅書斎（2014年）

内橋克人とクルーズ（2011）。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は1994（平成6）年7月から雑誌「文藝春秋」で3回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「規制緩和と関係する限り日本の各メディアは、『規制緩和と日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

■万能論に潜む危うさ

当時の平外四経団連会長を座長とする細川護国首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は経済的規制は原則自由、社会的規制は「自己責任を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもはやされた。

内橋さんは60代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国の調査し、新産業は本国内生まれの雇用はどうかのVアメリカの狙いは何かを詳細に調べた。「日本の規制緩和と運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。

恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方中流層をなす労働者、中小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人が辛酸を嘗めることになるだろう」。

規制緩和という悪夢



宇沢弘文さん（1928〜2014年）。数理経済学者、社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（1995年）

予言的中した。格差社会の到来だ。10年余りの2006年刊の悪夢のサイクル「ネオリバリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で



経済学の在り方を問う

共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重典、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学たちだ。規制緩和と礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないが、経済学はこれをどうしたのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起りつつあることを冷静な目で見て、アビリティンガ形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら多岐にわたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済学の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていくための器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。2人の対談は「始まっている未来、新しい経済学は可能か」として09年に刊行された。（加藤正文）

規制緩和という悪夢 1995年刊「続編が、悪夢のサイクル」ネオリバリズム循環（2006年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。経済学は誰のためにあるのか（1997年）もアカデミアとジャーナリズムをつなぐ書。

神戸新聞2022.9.3.朝刊より

和鉄の道・Iron Road

経済評論家 内橋克人氏の評論他 関連資料掲載記事リスト

2022.9.1.内橋克人氏没後1年 By Mutsu Nakanishi

2021年10月 From Kobe より

「経済評論家 内橋克人氏 逝去」の訃報に接して 懐い出すままに

常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星



和鉄の道・Iron Road

経済評論家 内橋克人氏の評論他 関連資料掲載記事リスト

2022.9.1.内橋克人氏没後1年 By Mutsu Nakanishi

- 2021.9.5. 内橋克人氏逝去追悼記事 内橋克人氏主要業績紹介
- 2012.1.1. 年の初め 内橋克人氏の100年後へのメッセージ

ホームページ「和鉄の道・Iron Road - from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事リスト

◎和鉄の道・Iron Road - 2012年の初めにより

内橋克人氏「100年後へのメッセージ」

<https://infokkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2012年1月

厳しさを力に 経済評論家 内橋克人氏100年インタビューに共感して by Mutsu Nakanishi

<https://infokkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsum/fkobe1201.pdf>

参考添付 内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送「内橋克人 100年インタビュー」視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年8月より

あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮

NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介

創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまされ絵をダブらせ今一番自分 にずっと入る

<https://infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsum/fkobe1308.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2013年9月より

新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介
今 日本で一番求められている地域を元気にする

日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践

<https://infokkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsum/fkobe1309.pdf>

◎和鉄の道・Iron Road From Kobe 2018年12月より

日本の行く先がおもしろいやられる師走 数か頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る
こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも

<https://www.infokkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsum/fkobe1812uchihashi.pdf>

- 戦争時代の反省 戦中・戦後 そして 今も続く社会構成の原点 日本人気質
 - 頂点同調主義
 - 熱狂的な等質化現象 リーダーにゆだねる・異を排する
- 1960年代 高度経済成長 頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長
 - 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
 - 公害ほかの矛盾に蓋をした成長
 - ・ 生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発 独創性のなさが弱点
 - ・ 基礎技術・革新技術開発の遅れ

世界一の技術立国日本の謳歌 ⇔ 異を唱えられぬ日本の社会
- 1970年代後半 石油ショックによる原油価格の急騰 「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入
 - 1974 第一次石油ショック・中東戦争 ・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト
 - 1979 第二次石油ショック・イラン革命 ・厳しい国際競争にさらされる
- 1985年～2008年 バブル経済とその終焉 不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代
 - 1986～ バブル景気 マネー資本主義の時代へ
アメリカ型資本主義 株価至上主義
 - 1991 バブルの崩壊
- 1990年代～ 不況克服へ 規制緩和と企業国際化の急速展開
 - 2001 エンロンの破たん
 - 2000～ 雇用不安など社会問題急拡大 企業の国際化急展開
 - 非正規雇用
 - 外国人投資の急上昇
- 2011年 東日本大震災・原発事故 そして年金問題と破綻寸前の国家財政 急激な円高 政治の貧困
 - 日本経済の疲弊と格差拡大 企業の海外移転の急拡大
 - 舵取りのなき日本に先行きが見えず 社会全体に広がる閉塞感・不安感

グローバル化 市場原理主義経済
効率化・国際競争力
金融のビッグバン強欲資本主義へ
グローバル化の名のもとアメリカ中心
の枠組に日本が飲み込まれてゆく

もうひとつの経済学「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済 これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる



トリクルダウン効果の枠組みが完全に崩れ去っており、国際競争力・市場主義を楯に企業・金融優遇の政策の中で 国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。
国際企業・金融依存から脱し、特に 現日本の社会の自己矛盾を生んできた源 食糧・エネルギー・高齢化[介護・医療]の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

「理念型経済学 -市場主語から国民主語の経済-」の構築の実現は可能
矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済
これらの自立・自給がないと 国際マネーの餌食となる

- 自給自立型農業の構築
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自給率数百パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業



- 頂点同調から脱して声をあげよう
- 質を伴った勇気を
市場主語から国民主語の経済構築へ



『働き方の多様化とは何か』内橋克人 2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説 実に明快分かりやすい解説に

私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。
「日本ではこれが、こっちゃんにされて 都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。

同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、

雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。

正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、

いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル スタンダードが

非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、

けっしてそんなことはない」

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎ 例えば、『オランダモデル』の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。

2018. 11. 29. 神戸新聞(1・2面掲載)

「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相

針路21

内橋 克人



目立つ内外の食い違い

針路21

時の政権にとって「貿易協定」は物議を醸した。自由貿易協定（FTA）の推進は、安倍政権の重要な政策の一つである。しかし、その推進には、国内の様々な課題がある。特に、労働者の権利や社会保障の面で、内外の食い違いが目立つ。この食い違いは、単に賃金格差にとどまらず、雇用保険や福利厚生などの全般的な格差にまで広がっている。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。

また、労働時間の長短による賃金差別も問題となっている。同一労働同一賃金の原則が、現実には十分に守られていない。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。また、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。

「安倍外交」の実相は、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。また、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。

「安倍外交」の実相は、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。また、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。

国を危うくする言い繕い

「安倍外交」の実相

針路21

「安倍外交」の実相は、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。また、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。

「安倍外交」の実相は、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。これは、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。また、労働者の権利を軽視しているという批判を招いている。